

ポジティブ・イリュージョンと文化的自己観および動機の期待変数との関係

高山草二*

Soji TAKAYAMA

Relationships between positive illusion and cultural self-construal, expectancy variables of motivation

要 約

ポジティブ・イリュージョンが文化依存的な現象であるかどうかに関して、文化間変動として提出された文化的自己観を文化内変動として取り上げて検証した。日本の学生において、文化的自己観尺度を用いて相互協調性が高く相互独立性が低い群（相互協調群）と、その高低が逆の構成の群（相互独立群）を設定して調べたところ、「自己」の領域において相互協調群ではポジティブ・イリュージョンはほとんどみられず、むしろネガティブ・イリュージョンが多くみられた。これに対して、相互独立群ではポジティブ・イリュージョンが主にみられた。同様の傾向は「自己」以外の「統制」の領域においても確認された。ポジティブ・イリュージョン（または、ネガティブ・イリュージョン）には文化的自己観が深くかかわっていることを確認するものである。また、ポジティブ・イリュージョンが精神的健康に影響するという主張に関して、他の肯定的な影響を探るため、動機の期待変数として自己効力感と統制の位置の2変数を取り上げて関係を検討した。その結果、ポジティブ・イリュージョンはこれら動機変数に対しても有意な関係が見られ、より広い肯定的影響を確認した。

【キーワード：ポジティブ・イリュージョン、文化的自己観、抑うつ、自己効力、統制の位置】

はじめに

自己と動機の接点として、自己高揚動機は重要な働きをしている。この動機がかかわる問題として特に注目されるのが、「人は自分の都合の良いように認識し、それが適応的に生きていく上で必要である」とするポジティブ・イリュージョンに関する現象である。正確な自己客観視を精神的健康の必要条件とする従来の考え方とは対照的に、Taylor & Brown (1988) はポジティブに偏った自己概念を持っていることが精神的健康につながるという、新たな精神的健康観を提唱した。

Taylor & Brownによると、ポジティブ・イリュージョンは、実際以上に(1)自分自身をポジティブにとらえる、(2)自分の将来を楽観的に考える、(3)外界に対する自己の統制力を高く判断するものである。そして、このことから精神的に健康な人には、自己を良き者と考え、自分の未来を明るく描き、自己の統制力を強く信じる傾向が見られるとし、これらが精神的健康に結びついていると結論した。

欧米においては、自己に都合の良いように傾いた認知、すなわち自己高揚的な認知が精神的健康につながる、という方向で実証的研究、理論化が展開されている。しかし、日本人にも同様のことが成り立つかどうかに関してもあまり明確ではない。

Heine & Lehman (1995) はカナダ人と日本人の大学生について、楽観主義傾向を調べている。その結果カナダ人が一貫して非現実的な楽観主義傾向を示すのに対して、日本の学生は否定的な出来事の生起確率を相対的に尋ねた場合（平均的な他者と比較して）のみ楽観主義傾向を示した。

外山・桜井 (2000, 2001) は、日本の大学生を対象にして、自己、楽観主義、統制の3つの領域に関して、他者のそれよりポジティブに認知するか、ネガティブに認知するかを調べた。その結果、「自己」の領域の「調和性」ならびに「誠実性」の側面でポジティブ・イリュージョンが見られた。また、全般的に見れば「楽観主義」と「統制」の領域においてもポジティブ・イリュージョンが見られた。逆に、「自己」の領域の「社交性」「知的能力」「身体的望ましさ」ならびに「楽観主義」と「統制」の領域の金銭的なギャンブル要素を含むイベントにおいて、平均的な他者よりもネガティブに認知するネガティブ・イリュージョンが見られた。

また、ネガティブ・イリュージョンが生ずる傾向の強い側面においては、自己高揚的な認知だけでなく、自己を平均的だとみなす控えめな認知も精神的健康と関わっていることが判明した。また、ポジティブ・イリュージョンが生じやすい側面においては、自己高揚的な認知が心理的満足に関わることで、自己を平均的だと捉える人たちは、

* 島根大学教育学部心理・発達臨床講座

自己を相対的に卑下して認知する人たちと同様に、精神的に不健康であることがわかった。

欧米とは違う日本人のポジティブ・イリュージョン現象を検討する上で、注目すべき問題は、文化的自己観の概念である。文化的自己観とは、ある文化において歴史的に共有されている人間観あるいは「自己」についての前提であり、心理と文化の相互構成の過程での1つの中核である(北山, 1994)。Markus & Kitayama (1991)は、文化的自己観として相互独立的自己観と相互協調的自己観を挙げている。前者は、自己を他者から分離した独自の実態と捉えるもので、西欧とりわけ北米中産階級に典型的である。後者は、他者と互いに結びついた人間関係の一部として自己を捉える考えで、日本を含むアジア文化に一般的である。この2つの自己観により、認知、感情、動機づけ等の心理過程は大きく異なるという。文化的自己観は社会的表象であるが、これが個人の自己認識へ反映され、個人の「相互独立性」「相互協調性」を形成すると考えられ、これらを測定する尺度がいくつか構成されている(高田, 1999)。

ところで、「相互独立性」と「相互協調性」という対比は、相対的なものであり、一つの文化に優位な傾向を示すものである。従って、日本文化において、全体として相互協調性が強いにせよ、「相互独立性」と「相互協調性」がともに見られるはずである。そこで、本研究では、日本という一つの文化において、文化的自己観を反映した「相互独立性」と「相互協調性」が、ポジティブ・イリュージョンにどのように影響しているのかを検討する。文化間変動として提出された文化的自己観を文化内変動として取り上げ、ポジティブ・イリュージョンの文化依存性を直接的に明らかにしたい。

また、ポジティブ・イリュージョンは精神的健康につながると考えられているが、これ以外の影響については明らかにされていない。そこで、精神的健康として抑うつを調べるとともに、動機づけへの影響として、自己効力感と統制の位置の2つの期待変数を取り上げて検討する。これにより、ポジティブ・イリュージョンの影響をより広く確認できると考えられる。

方 法

被調査者

大学生計211名。このうち、有効回答数は計210名(男80名、女130名)であった。

質問紙

(1) 自己認知に関する質問紙 外山(1999)のポジティブ・イリュージョンを測定するための質問紙を原案として使用した。原案はTaylor & Brown(1988)のポジティブ・イリュージョンの定義に従って、「自己」、「楽観主義」、「統制」の3つの領域から構成されている。「自己」に関しては、社交性、知的能力、調和性、誠実性、身体的望ましさの5つの下位領域があり、「楽観主義」と「統制」はそれぞれネガティブイベントとポジティブイベントから構成さ

れている。なお、原案では、「統制」については楽観主義のそれぞれの質問項目に対する統制可能性をたずねるという形式がもちいられていた。今回の調査で使用した質問紙は、外山・桜井(2000, 2001)の研究結果などを考慮し、原案からそのまま抜粋した項目と調査者が新たに加えた項目の計48項目からなる。「自己」は20項目、「楽観主義」は14項目、「統制」は14項目である。以上のことを「同じ大学に通う一般的(平均的)な大学生と比べてあなたは」と評定を求める相対的方法を用いて、7段階評定で行った。(項目内容は結果の表1, 2, 3を参照)

(2) 抑うつ傾向尺度 Zung(1965)が開発したSDSの日本語版(福田一彦・小林重彦, 1973)を用いた。これは20項目で構成されており、4段階評定である。高得点者ほど抑うつ傾向が強いことを示している。

(3) 特性的自己効力感尺度 自己効力感(Bandura, 1977)のうち特性的な側面を測定するために、成田・中里・河合・佐藤・長田(1995)が作成したものを用いた。これは、23項目で構成されており、5段階評定である。「行動を起こす意志」「行動を完了しようと努力する意志」「逆境における忍耐」などから構成されている。

(4) 統制の位置尺度 統制の位置(LOC, Rotter, 1966)の概念を測定するために、鎌原・樋口・清水(1982)によって作成されたLOC尺度を用いた。これは18項目で構成されており、4段階評定である。自分自身の行動とその強化が随伴しており、強化の統制が可能であるという信念をもっているかどうかを測定するための尺度である。

(5) 文化的自己観尺度 高田(1999)の作成した尺度を用いた。「相互独立性」10項目、「相互協調性」10項目、合計20項目の尺度である。各項目に対して「全く当てはまらない」から「ぴったり当てはまる」までの7段階評定を求めた。相互独立性には「個の認識・主張」「独断性」の2つの下位領域が、相互協調性には「他者の親和・順応」「評価懸念」の2つの下位領域がある。

手続き

調査は1つの授業の中で集団形式で実施した。質問紙は自己認知に関する質問(「自己」「楽観主義」「統制」)、抑うつ傾向尺度、特性的自己効力感尺度、統制の位置尺度、文化的自己観尺度の順番で構成されていた。調査に要した時間は15分程度であった。

結果と考察

まず、ポジティブ・イリュージョン現象を測定する自己、楽観主義、統制の各項目において、各々の質問項目の1~7の7段階評定を-3~3に変換した。したがって、自己を他者と同程度にみなしている場合には、“0”、自己を他者よりもポジティブに評価している場合にはプラスの数値、逆に自分を他者よりもネガティブに評価している場合にはマイナスの数値となる。

文化的自己観尺度について、主成分分析を行い、斜交回転を行った結果、高田(1999)と同様の2因子解が得られた。それぞれ、「相互独立性」と「相互協調性」を

表1. 「自己」の領域における「全体」と「相互協調群」「相互独立群」の各群ごとの平均値の検定

	全体			相互協調群			相互独立群		
	平均値	SD	t 値	平均値	SD	t 値	平均値	SD	t 値
誠実である	.61	1.35	6.54**(P)	.52	1.31	3.44*(P)	.71	1.49	4.10**(P)
容姿がよい	-.58	1.44	-5.88**(N)	-1.03	1.47	-6.05**(N)	-.32	1.41	-1.91
素直である	.46	1.45	4.61**(P)	.35	1.47	2.04	.62	1.57	3.36*(P)
積極的である	-.14	1.58	-1.31	-1.01	1.37	-6.40**(N)	.63	1.49	3.62*(P)
頭の回転が速い	-.12	1.59	-1.09	-.80	1.56	-4.44**(N)	.40	1.55	2.19
健康的に見える	.67	1.66	5.85**(P)	.56	1.67	2.90	.78	1.80	3.71**(P)
同性の間で人気がある	-.16	1.27	-1.80	-.48	1.31	-3.18*(N)	.11	1.31	.72
思いやりがある	.53	1.29	5.92**(P)	.33	1.33	2.17	.64	1.37	4.02**(P)
スタイルがよい	-1.04	1.42	-10.57**(N)	-1.55	1.28	-10.49**(N)	-.79	1.44	-4.70**(N)
寛大である	.37	1.43	3.72**(P)	.37	1.54	2.10	.47	1.53	2.60
きちょうめんである	.11	1.65	.96	.03	1.68	.14	.25	1.79	1.18
社交的である	.03	1.53	.32	-.41	1.68	-2.08	.42	1.44	2.52
ファッションセンスがよい	-.69	1.33	-7.49**(N)	-.92	1.33	-5.98**(N)	-.53	1.32	-3.45**(N)
まじめである	.49	1.45	4.90**(P)	.37	1.44	2.24	.78	1.40	4.78**(P)
親切である	.50	1.20	5.95**	.23	1.31	1.51	.68	1.13	5.18**(P)
知的である	-.15	1.35	-1.64	-.63	1.28	-4.23**(N)	.23	1.42	1.40
おおらかである	.46	1.46	4.56**(P)	.40	1.57	2.21	.53	1.63	2.79
魅力的である	-.50	1.43	-4.98**(N)	-1.07	1.35	-6.85**(N)	-.18	1.51	-1.01
責任感がある	.53	1.45	5.29**(P)	.09	1.65	.49	.90	1.35	5.74**(P)
異性の間で人気がある	-.98	1.39	-10.18**(N)	-1.36	1.42	-8.29**(N)	-.78	1.40	-4.78**(N)

* p<.05 ** p<.01 Bonferroni の方法により p 値を修正した。
(P) ポジティブ・イルージョン, (N) ネガティブ・イルージョン

表2. 「楽観主義」の領域における「全体」と「相互協調群」「相互独立群」の各群ごとの平均値の検定

	全体			相互協調群			相互独立群		
	平均値	SD	t 値	平均値	SD	t 値	平均値	SD	t 値
大きな病気にかかる	.91	1.95	6.80**(P)	.88	2.00	3.81**(P)	1.09	1.97	4.79**(P)
人間関係にめぐまれる	.93	1.44	9.37**(P)	.73	1.41	4.51**(P)	1.09	1.55	6.06**(P)
豪邸に住む	-1.07	1.52	-10.25**(N)	-1.35	1.33	-8.77**(N)	-.95	1.74	-4.67**(N)
交通事故に遭う	.86	1.70	7.30**(P)	.84	1.68	4.29**(P)	1.12	1.68	5.74**(P)
宝くじにあたる	-1.05	1.88	-8.06**(N)	-1.37	1.65	-7.21**(N)	-.77	2.09	-3.17*(N)
仕事を解雇される	1.29	1.48	12.60**(P)	1.16	1.43	7.01**(P)	1.34	1.54	7.49**(P)
失恋する	-.19	1.76	-1.56	-.36	1.82	-1.71	.09	1.74	.47
借金をする	1.41	1.64	12.37**(P)	1.51	1.66	7.86**(P)	1.29	1.68	6.55**(P)
災害に遭う	.60	1.53	5.73**(P)	.57	1.61	3.08	.62	1.58	3.39*(P)
大金を手に入れる	-.71	1.59	-6.49**(N)	-1.00	1.56	-5.55**(N)	-.53	1.64	-2.76
大学で優秀な成績をおさめる	-1.06	1.59	-9.64**(N)	-1.44	1.52	-8.22**(N)	-.69	1.74	-3.42*(N)
一生お金を不自由しない	-.89	1.45	-8.83**(N)	-1.16	1.40	-7.20**(N)	-.76	1.59	-4.08**(N)
ガンになる	.57	1.77	4.64**(P)	.48	1.80	2.30	.57	1.84	2.66
幸せな結婚生活を送る	.86	1.51	8.27**(P)	.89	1.46	5.31**(P)	.82	1.70	4.17**(P)

* p<.05 ** p<.01 Bonferroni の方法により p 値を修正した。
(P) ポジティブ・イルージョン, (N) ネガティブ・イルージョン

表してあり、因子に含まれる項目の平均値を算出して下位尺度値とした。信頼性 (α 係数) は、「相互独立性」が .835, 「相互協調性」が .790 であり、十分信頼できる値であった。これら 2 つの下位尺度間の相関は -.422 であり、中程度の負の関係が得られた。2 つ下位尺度の平均値を比較すると、「相互協調性」の方が「相互独立性」よりも高かった (4.98 と 4.00, $t(209) = 9.41, p < .001$)。

ポジティブ・イルージョンまたはネガティブ・イルージョンが起こっているかどうか検討するために、評定値の平均が 0 と異なるかどうかを t 検定により検討した。つまり、平均が有意に正であればポジティブ・イルージョンが、逆に有意に負であればネガティブ・イルージョン

が集団としてみられることを意味する。自己の領域に関しては表 1, 楽観主義の領域に関しては表 2, 統制の領域については表 3 のそれぞれ全体の欄に示した。

ポジティブ・イルージョンが、誠実、素直、健康的、思いやり、寛大、まじめ、親切、おおらか、責任感などの自己属性においてみられた。これに対して、ネガティブ・イルージョンは容姿、スタイル、ファッションセンス、魅力的、異性への人気などにおいて生じていた。

外山らの研究と同様、日本人でもポジティブ・イルージョンがみられるが、ネガティブ・イルージョンも同時に混在している。日本の文化において望ましいと考えられる属性などはポジティブ・イルージョンが生じ、知性

表3. 「統制」の領域における「全体」と「相互協調群」「相互独立群」の各群ごとの平均値の検定

	全体			相互協調群			相互独立群		
	平均値	SD	t 値	平均値	SD	t 値	平均値	SD	t 値
長生きをする	.32	1.66	2.80	.25	1.67	1.31	.42	1.71	2.13
すばらしい恋愛をする	.55	1.66	4.81**(P)	.41	1.72	2.08	.75	1.78	3.62*(P)
宝くじにあたる	-1.05	1.78	-8.53**(N)	-1.19	1.68	-6.11**(N)	-.86	1.91	-3.86**(N)
なくした大切なものが見つかる	.04	1.49	.42	-.24	1.46	-1.42	.28	1.58	1.50
災害に遭わない	-.34	1.69	-2.90	-.60	1.69	-3.07*(N)	-.15	1.68	-.77
就職がうまくいく	.58	1.55	5.43**(P)	.31	1.53	1.73	.78	1.61	4.15**(P)
競争率の高い試験に合格する	.12	1.71	1.05	-.29	1.76	-1.44	.37	1.77	1.79
幸せな結婚生活をおくる	.96	1.59	8.75**(P)	.97	1.64	5.13**(P)	1.08	1.61	5.76**(P)
生涯お金に困らない	-.09	1.64	-.80	-.21	1.55	-1.19	.05	1.81	.26
大学を優秀な成績で卒業する	-.51	1.66	-4.41**(N)	-.85	1.67	-4.41**(N)	-.15	1.79	-.72
借金をしない	1.00	1.72	8.41**(P)	1.31	1.71	6.62**(P)	.93	1.62	4.92**(P)
人間関係がうまくいく	.73	1.32	7.97**(P)	.69	1.32	4.48**(P)	.90	1.42	5.41**(P)
交通事故に遭わない	.01	1.65	.13	-.04	1.70	-.20	.22	1.71	1.10
豪邸を建てる	-.57	1.67	-4.94**(N)	-.71	1.61	-3.80**(N)	-.56	1.80	-2.66

* p<.05 ** p<.01 Bonferroni の方法により p 値を修正した。

(P) ポジティブ・イллюージョン, (N) ネガティブ・イллюージョン

や身体的特徴など、表出によって集団からネガティブに評価されそうな属性ではネガティブ・イллюージョンが生じたといえよう。

次に、相互協調性と相互独立性の各下位尺度に基づいて、中央値で高群と低群に分割した。その上で、協調性が高く、独立性が低い「相互協調群」(75人)と協調性が低く、独立性が高い「相互独立群」(74人)を構成した。

協調性または独立性によってポジティブ・イллюージョンが起こっているかどうか検討するために、「相互協調群」と「相互独立群」それぞれにおいて、自己、楽観主義、統制の各質問項目において、評定値の中央値(=0)との違いをt検定により検討した(表1, 2, 3)。

「自己」の領域においては、「相互協調群」はネガティブ・イллюージョンが多く、ポジティブ・イллюージョンは1つしか見当たらない。それに対して「相互独立群」では、ポジティブ・イллюージョンが多く、ネガティブ・イллюージョンは3つとむしろ少ない。

ポジティブ・イллюージョンは相互独立性の高い場合にみられ、相互協調性が高い場合には少なくなると考えられる。相互協調性のもとではむしろネガティブ・イллюージョンが多くなる。

「楽観主義」の領域においては、協調性が高い場合と独立性が高い場合で大きな違いは見られず、ポジティブ・イллюージョンとネガティブ・イллюージョンが混在しており、全体の傾向と類似していた。しかし、「統制」の領域においては、「相互独立群」ではポジティブ・イллюージョンが多くなり、ネガティブ・イллюージョンはほとんどみられない。「相互協調群」の場合、ポジティブとネガティブのイллюージョンが混在しており、全体と同様の傾向を示している。

以上、ポジティブ・イллюージョンには文化的自己観が関与しており、独立性が高い場合に生じやすい。それに対して相互協調性が強くなるとポジティブ・イллюージョンは生じにくく、ネガティブ・イллюージョンが増加する。

表4「自己」の領域の因子分析

項目	因子1	因子2
思いやりがある	.777	.226
親切である	.763	.172
誠実である	.763	.106
おおらかである	.709	.215
まじめである	.689	-.002
寛大である	.652	.196
素直である	.608	.232
責任感がある	.590	.128
健康的に見える	.368	.193
きちょうめんである	.293	.198
魅力的である	.361	.738
容姿がよい	.150	.733
異性の中で人気がある	.134	.728
スタイルがよい	.022	.693
頭の回転が速い	.252	.693
同性の中で人気がある	.406	.625
ファッションセンスがよい	.025	.616
積極的である	.256	.590
知的である	.435	.492
社交的である	.421	.474

ポジティブ・イллюージョンはやはり相互独立性が強い文化において顕著にみられる現象であり、相互協調性が強い文化においては、むしろネガティブなイллюージョンが顕著になるといえよう。日本人においては、2つの側面が混合していることにより、ポジティブとネガティブの両方のイллюージョンがみられると考えられる。

Heine & Lehman (1995) や北山 (1994) が述べているように、相互独立的な自己観のもとでは、文化的な理想の実現のためには個人として有能であることが必要となる。そのために平均以上であるという自己高揚的なバイアスが働くのである。これに対して、相互協調的な自

己観では、精神的な健康は個人の有能さとは関係せず、他者や周囲の世界との良好な関係や所属の感覚に結びついていると考えられる。個人や未来についての自己高揚的な評価は、相互独立的な自己観の場合のような妥当性を持たないのである。相互協調性からは役割志向性が生じやすく、役割に関する期待に照らして至らない点を見つけ、らしさにそえるようにすることから、自己批判的な傾向が強くなると考えられる。

最後に、自己、楽観主義、統制の各領域別に因子分析を行った。「自己」の領域に関しては2因子解を採用した。因子1は比較的ポジティブ・イリュージョンが起りやすい項目からなり、自己Pとし、因子2は比較的ネガティブ・イリュージョンが起りやすい項目からなり、自己Nとした(表4)。楽観尺度に関しても2因子解を採用し、ポジティブとネガティブのイリュージョンを生じやすい楽観Pと楽観Nを構成した(表5)。「統制」の領域に関しても2因子解を採用し、同様の性質をもつ統制Pと統制Nとした(表6)。6つの下位尺度各々の信頼性係数(α 係数)は、自己Pは.840、自己Nは.877、楽観Pは.718、楽観Nは.712、統制Pは.827、統制Nは.699であり、十分な信頼性が得られた。

抑うつ性尺度(以下 SDS)については、合計点を算出した。SDSの信頼性係数(α 係数)は.794と信頼できるものだった。自己効力感、LOC 各々についても合計点を算出して尺度値とした。信頼性係数(α 係数)は、自己効力感が.833、LOCが.741であり、十分な値を示した。

自己、楽観主義、統制の6尺度と抑うつ、自己効力感、統制の位置の間の相関係数を求めた(表7)。6尺度はすべて抑うつと負の相関がみられる。特に楽観Pは-.47とかなり強い相関であり、自己Nと統制Pがそれについて強い。基本的には自己高揚的な認知が精神的健康に結びついていることを示している。さらに、自己高揚と自己効力感、統制の位置もともに6尺度すべてと.30前後の正の相関がみられる。自己高揚的な認知は動機づけの側面においても肯定的な影響を持つといえよう。ポジティブ・イリュージョンの肯定的な影響が広い範囲に及ぶことを示している。また、ポジティブ・イリュージョンと動機づけの期待変数は類似の概念かもしれない。今後のより深い検討が必要である。

注)本調査は2004年度実験実習の一環として実施された。

表5「楽観主義」の領域の因子分析

項目	因子1	因子2
災害に遭う	.766	-.007
ガンになる	.656	.132
交通事故に遭う	.634	.037
大きな病気にかかる	.632	.113
仕事を解雇される	.622	-.064
借金をする	.546	-.199
人間関係にめぐまれる	.365	.364
失恋する	.341	.015
豪邸に住む	-.030	.793
大金を手に入れる	-.191	.747
宝くじにあたる	-.136	.627
一生お金に不自由しない	.102	.601
大学で優秀な成績をおさめる	.075	.534
幸せな結婚生活を送る	.353	.479

表6「統制」の領域の因子分析

項目	因子1	因子2
就職がうまくいく	.726	.150
競争率の高い試験に合格する	.719	.046
生涯お金に困らない	.691	.148
幸せな結婚生活をおくる	.644	.336
大学を優秀な成績で卒業する	.635	.050
人間関係がうまくいく	.625	.281
すばらしい恋愛をする	.587	.304
借金をしない	.560	-.203
長生きをする	.485	.243
災害に遭わない	.111	.701
宝くじにあたる	.001	.690
交通事故に遭わない	.196	.671
なくした大切なものが見つかる	.088	.615
豪邸を建てる	.418	.495

参考文献

Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.

福田一彦・小林重彦 1973 自己評価式抑うつ性尺度の研究 *精神神経学雑誌*, **75**, 673-679.

Heine, S. J., & Lehman, D. R. 1995 Cultural variation in unrealistic optimism: Does the west feel more invulnerable than the east? *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 595-607.

表7「自己」「楽観」「統制」の6つの下位尺度および抑うつ、自己効力感、統制の位置の間の相関係数

	α 係数	抑うつ	自己効力感	LOC	自己N	楽観P	楽観N	統制P	統制N
自己P	.84	-.22**	.27***	.27***	.57***	.27***	.37***	.37***	.33***
自己N	.88	-.32***	.35***	.25***		.25***	.52***	.34***	.38***
楽観P	.72	-.47***	.29***	.32***			.10	.34***	.18**
楽観N	.71	-.19**	.35***	.28***				.46***	.61***
統制P	.83	-.34***	.35***	.29***					.44***
統制N	.70	-.16*	.27***	.21**					

* p < .05, ** p < .01, *** p < .001

- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of Control 尺度の作成と, 信頼性, 妥当性の検討 教育心理学研究, 30, 302-307
- 北山忍 1994 文化的自己観と心理的プロセス 社会心理学研究, 10, 153-167.
- Marcus, H. R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications of cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 1995 特性的自己効力感尺度の検討 教育心理学研究, 43, 306-314
- Rotter, J. B. 1966 Generalized expectancy for internal vs. external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80, 1-28.
- 高田利武 1999 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程 —比較文化的・横断的資料による実証的検討— 教育心理学研究, 47, 480-489.
- Taylor, S. E., & Brown, J.D. 1988 Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 103, 211-222.
- Taylor, S. E. 1989 *Positive Illusions: Creative self-deceptions and healthy mind*. New York: Basic Books Inc.,
- 外山美樹・桜井茂男 2001 日本人におけるポジティブ・イリュージョン現象 心理学研究, 72, 329-335
- 外山美樹・桜井茂男 2000 自己認知と精神的健康の関係 教育心理学研究, 48, 454-461
- Zung, W. W. K. 1965 A self-rating depression scale. *Archives of Genral Psychiatry*, 12, 63-70.